

1. 【防災特集】JP子どもの森づくり運動がつなぐ防災の絆

9月の防災月間をひかえ、今月号では防災特集をお送りします。本稿は、先のプログラム集につづき、今年度内発刊予定の「10周年記念誌（理念版）」に掲載される防災特集のために実施された対談集から、その一部を掲載しました。出席者は、JP子どもの森づくり運動防災アドバイザーの鎌田修広さんと、地域と連携して優れた防災活動に取り組んでおられる「春明保育園」（東京都）の嶋田（しまだ）理事長です。進行は子森ネット清水が務めました。（対談会場：東京都世田谷区「春明保育園」）

【島生活の苦勞から掘った井戸】

嶋田：先ほど園庭のピオトープを見てもらいましたが、上方に設置したパイプからシャワーのように出ているのは井戸水なんですよ。3カ所ぐらい掘ったら、うまく水脈に当たってね。

清水：どこに掘られたんですか。

嶋田：園庭の端です。水質検査もして、区に相談して、「震災時井戸水提供の家」（※）という指定井戸の看板ももらったわけ。検査の結果も悪くなかったから、普通に使って大丈夫だけど飲む時は煮沸してくださいと言われています。



「春明保育園」園庭のピオトープ

*「震災時井戸水提供の家」世田谷区では災害時の生活用水確保のため、住民所有の井戸を震災対策用井戸として指定している。

清水：園庭で井戸を掘るって発想は、なかなかダイナミックですね(笑)。

嶋田：私は島で生活したことがあって、その経験が大きいですね。かつて伊豆諸島、小笠原諸島で教育関係の仕事をしていた時、一番大切なものは水なんです。ダムの水が底をつき東京消防庁に応援要請して海水を淡水にする大がかりな装置を運んでもらい生活用水（飲料水も含めて）を確保した経験があります。水が貴重だから天水を溜めて庭にまいたり、雑巾がけをしたり、生活用水にしたりする中で、改めて生活に一番大切なものは水だと思い知りました。

清水：そういう経験が先生のベースにあるんですね。

嶋田：そう。人間の生活に必要なのは水、そして、電気と火。発電機があればご飯が炊けるしね。あとプロパンガス。そうすればとりあえず一時しのぎができるという発想が最初からあったわけですね。小さな子どもたちは暗くなると怖がるから、電気は照明用にして防災倉庫に備えてあります。

清水：多分その延長線上の話になってくると思いますが、鎌田さんが最近「防災キャンプ」を提案されていますが、その基本も今、先生がおっしゃったことに近いですね。

鎌田：通常の園活動の中ではあまり感じないと思うのですが、園舎で防災キャンプをして一昼夜過ごしてみると、理事長が今おっしゃった水や電気、火のかけがえのなさに気づかれますよね。被災ってこういうことだったんだ。停電するとこんな感じなんだって。



対談風景

【煙の動きを把握して備える】

嶋田：最近、近くの花屋さんで火災が起きたんです。それで風と共にすごい煙が来た。だから皆を部屋に入れましたけど。住宅密集地の災害でやっぱり一番気になるのは火事ですね。天井に昇る煙の速さと、横に行く煙の速さは違うことを鎌田さんから教わりました。煙はあつと言う間に上昇してしまうので、横に逃げる方が良いんだよね。

鎌田：春明さんと一緒に取り組んだことのひとつが、調理室で火災が発生した場合の避難ルートの検証でした。普段の避難訓練では「煙の回り方について考えたことがない」と皆さんおっしゃっていたので、調理室のすぐ上の保育室や隣の部屋など、各部屋までの距離を実際にメジャーで計って、煙のスピードを計算して、煙の到達時間を割り出しました。すると、真上の保育室には30秒で煙が来る。そもそもの避難訓練のように、抱っこ紐で子どもをくり付けていたら全く間に合わないことがわかって、皆さんはとっとするわけです。極端な話、毛布にくるんででも良いから、廊下の端この出口手前まで先に子どもたちを運んでしまえば、煙は横の動きはゆっくりですから、それから抱っこ紐をつけた方が良さそうですね、と話し合いました。きちんと根拠を持って備えることは必要ですね。

嶋田：避難場所もね、これは専門家に聞いたんだけど、鉄道の高架下（「春明保育園」は小田急線豪徳寺駅のすぐ近く）は安全度が高いそうですね。どこも近くの公立学校が避難場所になっていますけれど、この辺りはどこへ行くにも家混みの狭い道を通っていかなければならない。だから場合によっては、高架下のような場所で待機するという選択肢も、私の頭の中にはありますね。



鎌田氏（手前）と嶋田理事長

鎌田：我々も二方向避難ということを常に念頭に置いていますが、選択肢を持っているだけで違いますよね。ないとどうしても避難所に行かなければいけないという先入観に支配されてしまう。

清水：公的な避難場所とは別に、自主的な避難場所を見つけておくことも必要なのでしょうね。

嶋田：公的な避難場所は水やご飯がもらえたりしますから、それはそれで行かなければならないけれど、そこに到着するまでに事故や災害に遭う危険性もありますからね。

【防災が秘める様々な可能性】

鎌田：防災について、全国どこの園でも言われるのが、「やらなきゃいけないのはわかっているのだけど、忙しくてねえ…」、大体そのセリフなんです。

清水：そうですね。

鎌田：では、実際に取り組んでいる園はどうしているかというと、忙しいから無理とあきらめず、保護者や地域の方に頼んで、取り組みを手伝ってもらっているのですよね。例えば、PTAや親父の会などに「大工仕事が得意な方いらっしゃいますか？」と呼びかけて、減災対策に周囲を巻き込んでいく。そうやって取り組みを可視化させることが今の時代、園の価値や信頼度を上げることにもつながると思うんですね。実は春明さんの防災講習会の最後に、保育士の方たちにサプライズで避難訓練をしていただいたんです。保護者や地域の方々に訓練を見せたことがないとおっしゃっていたので、この機会に見ていただくこと。突然のことで保育士の皆さんは驚かれていましたが、いつも通り臨場感あふれる素晴らしい訓練をされて、拍手喝采を浴びていました。

嶋田：あの後、騒音などに関して近所からの苦情が少なくなりましたね。地域とも一緒に合同訓練をするようになってから、やはり関係性は変わってきたように思います。

鎌田：園が核になってアクションを起こすことで、今度は必ず地域からも呼びがかかりますので、相乗効果を起こして町が活気づくきっかけにもなりますね。今まで防災は内々にやっていた園が多いと思いますが、今や地域を巻き込む切り口にもなるということです。いわゆる保育三法の新制度の影響で保護者との連携や地域とのネットワークづくりなども求められていますし、地域全体でリスクマネジメントを行っていく方向性も今後ますます望まれるようになると思います。

清水：そもそもはJP子どもの森づくり運動の自然体験活動から防災の取り組みが始まったわけですが、私は子どもが自然体験を豊富に経験することが災害に対する危機意識というか、センサーを育むことにもつながっていると思っています。だから、自然体験活動からスタートして防災にたどり着いたのも自然な流れと考えています。

鎌田：むしろ子どもの方が生きる力を持っているとも言えますからね。大人にできることは、「前もってやっていたら助かった…」とならないために、自分の中の面倒くさい、後回しにしたいと思う気持ちと闘いながら、災害に備えたアクションを一つひとつ積み重ねていくことです。

清水：今日はありがとうございました。

鎌田さんが進める、園で取り組む防災五つの心得

1. 園長・理事長まかせにしない

★point→防災について年長者まかせにせず、みんなで意見を出し合い、主体性を持って備えるということ。

2. “ちゃんと”備える

★point→消火器設置など法律上の義務を満たすだけでは不十分。災害発生時の具体的なイメージを描いて心配事は一つずつ解決しておこう。

3. 周囲を巻き込む

★point→忙しいからこそ、周囲を頼って備えよう。園が核となり、保護者や地域をどんどん巻き込んで行こう！

4. 防災・減災対策を“見える化”

★point→防災・減災対策のアピールは、今や園の評判や価値を上げることにつながる。また、取り組みの可視化が自身への鼓舞にもなる。

5. 習慣になるまでやり続ける

★point→地道な対策をコツコツ持続させていくことが大切。続けることで防災が習慣化し、当たり前のこととなる。

